

博士論文（要約）

清末思想研究——東西文明が交錯する思想空間

川尻 文彦

以下、本稿の目次、狙い、内容、意義を順に記す。

目次

序章

はじめに、一 「洋務・変法・革命」の語り、二 西洋文明との対峙、三 シンクレティズム、四 西洋文明の優位性と明治日本の「東学」、五 言語横断的実践、六 グローバル・ヒストリー——「空間」論的転回、七 「思想連鎖」をめぐる対話、八 清末中国の「思想空間」、九 本稿の構成

第一部 東西文明への視角

第一章 「中体西用」論と「学戦」——張之洞『勸学篇』の周辺

はじめに、一 「中体西用」論者としての張之洞像、二 「中学為体、西学為用」のスローガンの流行、三 「学戦」の時代——教育救国論の成立と流行、四 厳復「中体西用」論批判の歴史的背景、おわりに

第二章 辜鴻銘と「道德」の課題——東西文明を俯瞰する視座

はじめに、一 多様な辜鴻銘像、二 極東問題と「道德」、三 中国古典の英訳、四 『中国牛津運動故事』——張之洞の幕僚として、五 「道德」の内実、六 日本訪問、おわりに

第三章 近代中国における「文明」——明治日本の学術との関連で

はじめに、一 civilizationと「教化」、二 明治日本の「文明」論、三 華夷の弁別、四 「文明」と「公理」、五 学術思想のなかの文明、六 「文明」への批判、七 世界五大文明、八 文明の起源、おわりに

第一部のまとめ

第二部 東西の学知の連鎖

第四章 清末中国におけるルソー『社会契約論』

はじめに、一 ルソー『社会契約論』と中江兆民、二 『社会契約論』の翻訳史——馬君武訳『民約論』ほか、三 ルソーと西洋思想家群、四 ルソー『民約論』解説、おわりに

第五章 梁啓超の政治学——明治日本の国家学とブルンチュリを中心に

はじめに、一 『清議報』の伯倫知理「国家論」(一八九九年)、二 『訳書彙編』によるブルンチュリの紹介(一九〇〇年)、三 在野知識人のブルンチュリ理解、四 梁啓超における政治学の系譜、五 『新民叢報』の「政治学大家伯倫知理之学説」(一九〇三年)、六 梁啓超の「開明専制論」(一九〇六年)、おわりに

第六章 梁啓超と徳富蘇峰——馮自由「日人徳富蘇峰与梁啓超」と梁啓超の「盗

用」をめぐって

はじめに、一 梁啓超の「盗用」、二 多作な徳富蘇峰、三『大陸報』による「盗作」批判、四 『革命逸史』と馮自由、五 徳富蘇峰か福沢諭吉か、おわりに
第七章 近代中国における「哲学」——蔡元培の「哲学」を中心に

はじめに、一 康有為『日本書目志』、二 蔡元培の「東学」、三 一九〇三年の「哲学」熱、四 中国哲学史の叙述、五 五十年来中国之哲学、おわりに
第二部のまとめ

第三部 自由への懷疑と模索

第八章 清末の「自由」

はじめに、一 なぜ「近代」中国の「自由」か、二 幕末・明治日本における「自由」、三 初期の英華字典における訳語、四 福沢諭吉の「自由」と「自由」の論じられ方、五 「自由」と「自主」、六 嚴復による「自由」の訳語の確定、七 「里勃而特」(liberty)をめぐる論争、八 梁啓超と「自由」、九 在日留學生の雑誌による日本の「自由」学説の紹介、十 『群己權界論』翻訳後の嚴復と「自由」、おわりに

第九章 自由と功利——梁啓超の功利主義理解を導きに

はじめに、一 utilitarianismとは何か、二 西洋思想の「百科全書」、三 ベンサムとの出会い、四 樂利主義、五 定まらないベンサム像、六 「功利主義」への批判、おわりに

第三部のまとめ

第四部 共和革命を目指して

第十章 ある「革命」論——留日学生界の動向

はじめに、一 孫文神話、二 「革命軍」の興り、三 「革命」観の分岐、四 「中等社会」の提唱、五 「奴隸」から「国民」へ、おわりに

第十一章 宮崎滔天『三十三年の夢』と章士釗『孫逸仙』——孫文と共和主義

はじめに、一 孫文と宮崎滔天の出会い、二 共和主義の立場、三 孫文伝としての『孫逸仙』、おわりに

第十二章 近代中国におけるデモクラシーの運命——「民主」と「共和」

はじめに、一 新文化運動での「徳先生」、二 デモクラシーの訳語の混乱、三 「民主」と「民権」、四 「民権」をめぐる争論、五 『亜東時報』での提言、六 「民主共和国」の模索、おわりに

第四部のまとめ

終章

本稿の狙い

序章

本稿は「清末思想研究」と題した。清末思想の研究ではこれまで「洋務・変法・革命」の段階論（小野川秀美）、また「西洋の衝撃」に対する「中国の反応」によって描く近代中国像が主流であった。本稿はその両方を採らない。本稿は、西洋文明と東洋文明が交錯する思想空間として清末思想を捉える。「交錯」の言葉を使ったのは、「西洋対東洋」の二項対立図式を破棄し、一方通行的な「西学」受容史による中国近代思想叙述の問題点を認識しているからである。清末思想がレベンソンのような「シンクレティック」な、あるいは丸山眞男ののような「論理的な混乱」に満ちた雑多で多様な構造をもったものであることを一旦は承認する。それゆえ何らかの単一の図式や歴史観によってこれを解明することは難しい。研究方法的には私はD・アーミティジの「空間」論転回（ラヴジョイ「観念の連鎖」やスキナー「コンテクスト主義」への批判を含意する）やリディア・リウらの「言語横断的实践」（trans-lingual practice）に示唆を受けている。また「空間アジア」を提唱し清末中国と明治日本の「思想連鎖」に着目した山室信一の方法に近似するが、山室信一が日本語史料に過度に依拠していることと差別化を図り、中国内在的な理解（P・コーエン）につとめる。梁啓超をはじめとした中国の知識人たちが触れた明治日本の「東学」は清末思想研究において無視できない要素の一つではある。それは日本を通じて西洋文明を中国にもたらした回路の一つでもあった。私は中国の「受動的立場」を前提にした「西学」や「東学」の「受容」や「影響」といった図式を避け、中国の思想家たちが「西学」や「東学」を理解しようとしたその文脈に着目する。その文脈を私は一つの「思想空間」として捉える。その上で私は多言語史料（中・日・英）を活用し、「歴史の現場」に即した思想的な分析を加え、「中国を中国として理解する」ことを目指す。そこには発展段階論的叙述や国民国家的思想史を排する狙いもある。

本稿の内容

序章で述べたような問題意識を踏まえ、本稿は第一部「東西文明への視角」、第二部「東西の学知の連鎖」、第三部「自由への懐疑と模索」、第四部「共和革命を目指して」の四部構成をとる。以下にその梗概を掲げる。

第一部「東西文明への視角」では東西文明を分析する視座を提供した清末におけ

るいくつかの議論を紹介する。近代中国の知識人たちは東洋文明の立場から西洋文明をどのように捉えようとしたのか。第一章「「中体西用」論と「学戦」——張之洞『勸学篇』の周辺」では、「中学を体とし西学を用とする」としたいいわゆる「中体西用」論とはいかなるものであったのか。「中学」を墨守し洋務時代の体制内改革を支えたとされる「中体西用」論の再解釈を試みるとともに、張之洞『勸学篇』を当時の思想史的な文脈に位置づける。「中体西用」の背後に「学戦」といわれる世界認識があったことを指摘する。第二章「辜鴻銘と「道德」の課題——東西文明を俯瞰する視座」は清末中国の知識人では珍しく東西両文明に精通した辜鴻銘が東西文明を融合しようとした思想的な試みを分析した（辜鴻銘は1910年代の東西文化論戦の「発端」でもあった）。『尊王篇』（1901）、『中国牛津運動故事』（1910）、『中国人の精神（春秋大義）』（1915）など西洋語による著作によって中国文明を西洋人に説明しようとした彼の試みを一瞥する。辜鴻銘が提示した「道德」(moral)に着目し、辜鴻銘思想の総合的理解を目指した。辜鴻銘の日本滞在時期についても史料発掘を試みた。第三章「近代中国における「文明」——明治日本の学術との関連で」では「文明」に関する議論が近代中国においていかなる展開をしたのかを分析する。日本亡命前の梁啓超の「文明」をめぐる議論を取り上げる。伝統的な中華思想と西洋文明をめぐる議論がどのように衝突し、あるいは交わるのか。日本亡命後、梁啓超は福澤諭吉の「文明—野蛮」や明治日本における文明史を吸収する。社会進化論的な世界観を背景にした「文明」に対して梁啓超はどう対応したのか。当初は「国民」を強くするための「文明」という側面が強いが、その後、中国学術や政治思想の面で独自の論点を展開していく。

第二部「東西の学知の連鎖」では、西洋の諸学知（社会契約論、政治学、哲学）が中国においてどのように理解されたのかを具体的に分析する。西洋の学知を単なる「西学」の「受容」という枠組みだけで理解することは出来ない。西洋の学知の中国への仲介者としての「東学」（明治の日本人がなした仕事）にも言及する。第四章「清末中国におけるルソー『社会契約論』」では、ルソー『社会契約論』を取り上げる。ルソーは『民報』でも『新民叢報』でもともに高く評価された。「人間は自由なものとして生まれた」から始まる『社会契約論』はルソーの主著であり、天賦人権を唱えたものとして知られる。20世紀初頭の中国人はまず明治日本の『社会契約論』翻訳本（漢訳・和訳）からルソーを理解した。また中江兆民はじめ日本でのルソー理解は清末中国の知識人たちの『社会契約論』解釈に影響を与えた。また中国の知識人たちは『社会契約論』から何を汲み取ったのかを分析する。第五章「梁啓超の政治学——明治日本の国家学とブルンチュリの受容を中心に」は、梁啓超の政治思想に大きな影響を与えたとされながらも、

これまで専論的な分析がなされなかった明治日本の国家学（ドイツ国家学）とブルンチュリに対する梁啓超の理解について検討を加える。ブルンチュリは今日では忘れられた思想家ではあるが、当時はルソーと併称されていた。従来、1903年の訪米以降、梁啓超はブルンチュリ思想を導入することによって「保守化」したとされてきたが、その思想的な背景に対して深い分析が加えられたことはなかった。互いに論敵であった革命派と梁啓超の双方においてブルンチュリが提示した論点が共有されていたことを指摘する。第六章「梁啓超と徳富蘇峰——馮自由「日人徳富蘇峰与梁啓超」と梁啓超の「盗用」をめぐって」は、梁啓超の文章には日本語の「種本」が存在するとの指摘は梁啓超の存命中からしきりになされていたこと、またその際の種本は福澤諭吉ではなく徳富蘇峰であると「噂されていた」という興味深い事実を紹介する。『自由書』は徳富蘇峰の「写し」とされていた。福澤諭吉は目立たない。梁啓超の「東学」の知られざる背景に焦点を当て、彼の「東学」の質を問いかける。第七章「近代中国における「哲学」——蔡元培の「哲学」を中心に」はドイツ倫理学者である蔡元培を通じて近代中国における「哲学」成立史（北京大学校長であった蔡元培はその立会人であった）について言及する。「哲学」成立史については研究蓄積が多く、様々な観点から論じられてきた。ただしその際、言及されるのは王国維、章炳麟や胡適等の一部の思想家に限られていた。蔡元培が語る「哲学」は従来着目されることが少なかった。また蔡元培は胡適の「哲学」的な実践をどう評価したのか。蔡元培が参照した二〇世紀初頭の日本の「哲学」界の状況にも触れる。

第三部と第四部でそれぞれ自由と共和を取り上げたのは、当時の中国や日本の知識人たちはきまって西洋文明の核心に自由と民主（あるいは共和）を見出したことに由来する。彼らは自由や民主を論じることで、西洋文明を論じたのである。第三部「自由への懐疑と模索」では、近代中国における「自由」についての思索を独自の角度から分析を加える（従来清末の「自由」をめぐっては、嚴復を中心に西洋のリベラリズムとの比較論の観点から論じられることが多かったように思える）。多くの中国の知識人は「自由」を西洋近代社会の根幹であると考えており、「自由」について様々な思索を行っている。第八章「清末の「自由」」は、近代以降の中国の知識人が「自由」をどのように認識したのかを既存の研究に依拠しながら概括的に論じる。伝統中国では「勝手気儘」というネガティブな意味を付与されていた「自由」を人々はなぜ好ましい価値として受け入れたのか。「自由」についてまとまった見解を残している嚴復や梁啓超の思索をたどり整理する。清末の「自由」論のもつ多様な側面を明らかにしたい。明治日本での「自由」理解が中国にもたらした視点についても言及する。第九章「自由と功利——梁啓超の功利主義理解を導きに」は、清末の「自由」論を分析し深める一つの手がか

りとして梁啓超の「功利」主義理解を取り上げる。梁啓超は功利主義に対して一筋縄ではいかない態度を示している。当初、梁啓超は功利主義を「樂利」という観点から紹介しながらも「樂利」に対して判断を保留した。梁啓超の議論の背後には明治日本の学術界における功利主義解釈の問題が介在している。明治の諸学説に導かれながら梁啓超の功利主義理解は漂流した。彼は最終的には「新民説」の「論私徳」（1904年）において功利主義を破棄した。

第四部「共和革命を目指して」では、いわゆる「革命」論が興起したとされる時期を分析の対象にする。孫文を中心にした共和革命を目指した思想運動として清末思想を描くことを通例「革命史観」と呼ぶ。私は「革命史観」では捉えることの出来なかった側面に焦点を当て、新たな清末思想史像を提示する。清末は知識人たちが革命運動のかたわら西洋的なデモクラシーを探求した時期でもあった。第十章「ある「革命」論——留日学生界の動向」では、二十世紀初頭の革命論が目指したものは何かを『革命軍』の著者鄒容と秦力山ら留日学生界の動向に即して論じる。彼らは辛亥革命（1911年）を未経験であるが、「革命」という言葉にどのようなイメージをふくらませていたのか。従来、後世の歴史家によって革命論は孫文中心の武力革命で描かれがちであった。それとは異なる清末「革命」論の別の側面を指摘する。第十一章「宮崎滔天『三十三年の夢』と章士釗『孫逸仙』——孫文と共和主義」は、「革命家孫文」像が宮崎滔天『三十三年の夢』の中国語訳（章士釗訳『孫逸仙』1903年）の刊行により中国人社会で認知されたことの意味を史実に即して論じる。章士釗訳『孫逸仙』は抄訳（四分の一程度）に過ぎず、章士釗の意図であえて『三十三年の夢』の原文に忠実に訳さず、康有為と対比させ、孫文の特長を際立たせた。『三十三年の夢』の中で「共和主義」者として描かれた孫文が国際社会での知名度を獲得し、自らの革命宣伝に乗り出していくことになる。では孫文のいう「共和」とは何か（次章で若干触れる）。第十二章「近代中国におけるデモクラシーの運命——「民主」と「共和」」では中国におけるデモクラシー理解について論じる。新文化運動時期のデモクラシーとサイエンスの標語が知られる。デモクラシーは当初、古代ギリシアの直接民主政からくる「多人乱管」のイメージでとらえられた。デモクラシーは中国、日本において理解が難しく訳語は一定しなかったが、ヨーロッパの政体分類において「君主」制と異なるものとして「民主の国」に注目された。「民主」は「民権」はともにデモクラシーの訳語にされることもあった。「共和」は政体を意味するが、「民主」「民権」とも混用されることもあった。梁啓超は「民主」と「民権」はまったく異なる概念として用い、「君民共治」「君主立憲」を目指し「民権」を支持した。「民主」は「君主」を廃し、「専制」を打破する過激なニュアンスを含意し、革命派の主張するところとなる。

本稿の意義

終章では本稿の意義を明らかにする。本稿は清末思想の研究に当たり「西洋の衝撃」論を批判し、西洋対東洋（あるいは中国）の比較論や二項対立図式を思想分析の枠組みとしては用いない。そのうえでこの東西文明の二項対立図式に代わる視座として、私は清末中国と明治日本の間の「思想連鎖」に着目し、アーミテージのいう国際的な思想史研究を志向し、清末中国における「思想空間」を設定した。日中間の「思想連鎖」の追跡に当たっては、「西学」受容史による叙述を避けなくてはならないし、中国内面的視点を重視しないといけない。私は「洋務・変法・革命」はいうまでもなく、「自然から作為」や儒教の近代的変容過程の図式は採らないし、西洋文明中心の進歩史観も採らない。「全面的西洋化」論は清末民国初思想界にあっては局地的な現象に過ぎないことを確認しないとイケないであろう。丸山眞男は清末の思想家たちが思想の「非常な論理的混乱」の中にいたと指摘した。それは嚴復の思想の中にモンテスキューやスペンサーが脈略なく同居していることを根拠にしている。しかし本稿では中国の知識人が書き残した文章の中に古今東西の様々な思想が雑居しているのを無数に見てきた。例えば、堯、舜からモンテスキュー、ルソー、ジョージ・ワシントン、ギゾー、J・S・ミル、ブルンチュリ、スペンサー（生年順）。日本の思想家を挙げれば、福澤諭吉から加藤弘之、中江兆民、井上哲次郎、徳富蘇峰、宮崎滔天（生年順）。私はこれを「非常な論理的混乱」とは見なさない。中国の知識人の思想の中に何らかの「論理」があるはずだからである。それは何か。結論として言えば、本稿の叙述を通じて私は清末の「思想空間」に複数性の「文明」を見出した。中国の知識人は明治日本の「東学」も含めた複数の「文明」の中から選択的に自らの思想資源を探っていたのである。彼らは過去や現在の西洋文明あるいは中国文明いずれか一つの文明だけが「普遍」とみなす立場を採らない。それゆえ彼らの思索を西洋中心の文明史観や、あるいは「非西洋」や「反西洋」の観点から説明するのは妥当性を欠く。西洋対中国、文明対野蛮、伝統対近代の図式も思想分析の枠組みとしては使えない。というのは、その場合、西洋、中国、文明、野蛮、伝統、近代のいずれかを「普遍」とみなすことが前提となるからである。清末中国の「思想空間」には「普遍」を相対化するような世界認識の複数性があるかもしれない。それらの複数性を救い上げることがまさしく序章で述べたような「中国を中国として捉える」ということになるであろう。本稿でそれをなしとげることが出来たのか。諸賢のご批判を仰ぎたい。